

「カラー版すばる望遠鏡の宇宙 －ハワイからの挑戦－」

海部宣男 著, 宮下曉彦 写真, 岩波新書1087
全196 ページ, 定価1,000 円, ISBN 978-4-00-432087-7

小高 正嗣¹

本書は世界最大級の口径を持つ光学望遠鏡「すばる」による最新の宇宙・惑星観測の成果, およびすばる望遠鏡の建設にまつわるエピソードを簡潔にまとめたものである。すばる望遠鏡, およびすばる望遠鏡によって何が行われてきたかを手軽に知るための恰好の書であると言える。

本書全体は全7章から構成され, 1章はすばる望遠鏡の概要と観測現場の紹介, 2章はすばるによる様々な銀河の写真とその解説である。3章ではすばる望遠鏡建設の過程とすばるで用いられた最新技術が紹介され, 4章ではすばるの建設地であるハワイの風土およびハワイの人々との交流が語られている。5章から7章まではすばるによる最新の宇宙・惑星観測の話題が取り上げられ, 5章は遠方銀河観測による深宇宙探査, 6章は太陽系小天体の観測, 7章では太陽系外惑星の探査が紹介されている。頁数に制限のある新書の枠組の中で様々な話題を扱っているため, もう少し突っ込んだ記述が欲しい部分がないわけではない。しかし, 数々の天文写真およびそれらから得られる科学的成果の解説は, 頁数に制限があるゆえに簡潔で, 専門外の読者にとっても分かりやすいものになっている。

本書の特徴の一つは, 3章の扱いと4章の存在にある。巨大プロジェクトであったすばる望遠鏡建設の過程は, さぞかし劇的に語られていることであろうと当初は期待した(実際, すばる望遠鏡建設の話はNHKの某テレビ番組でも取り上げられたほどである)。しかし本書全体を通して眺めると望遠鏡建設過程の扱いはあっさりしており, それに関する苦労話も建設中の火災とそれによる殉難者の話を除けばドラマ仕立てというよりも報告書のような雰囲気ですとめられている。一方で建設地であるハワイの風土およびハワイの

人々との交流について1章を割り, 伝統文化と科学との関係について考察がなされているのは興味深い。ハワイの全ての人が必ずしも望遠鏡建設に好意的ではない中で, すばる関係者とハワイの人々との相互理解を進め和合していくための数々の取り組みには, 少なからぬ感銘を受けた。このような本書の特徴は, 著者が望遠鏡建設の後半期にすばるプロジェクトの責任者を勤め, 建設終了後も国立天文台長として著者の言うところの「望遠鏡を仕上げて命を吹き込む」作業に携わってきたことによるものと思われる。望遠鏡建設過程の詳細に興味のある読者には, プロジェクト立ち上げ期の責任者を勤めた小平桂一氏の著書[1]が参考になるだろう。

もう一つの特徴は, 全7章のうち2章を惑星科学に関連する話題が占めていることである。これは多数の最先端天文観測が惑星科学的な問題意識の下に行われていることをあらためて認識させてくれる。天文学と惑星科学との連携, 協力は今後ますます活発に行われていくであろうことが, 本書からひしひしと感じられるのである。

参考文献

- [1] 小平桂一, 2006, 宇宙の果てまで－すばる大望遠鏡プロジェクト 20年の軌跡－, 早川書房, 428頁。

1. 北海道大学大学院理学院宇宙理学専攻